

# 乳児の母親が行う調律的応答の個人差要因の検討 (中間報告)

東京大学大学院教育学研究科 蒲谷 慎介

## Factors that determine the frequency of mothers' attuned responses

Graduate School of Education, The University of Tokyo KABAYA, Shinsuke

### 要約

近年、共感性といった子どもの情動的知性の発達を促進するものとして、母親が行う調律的応答に着目する立場が台頭している。本研究では、その調律的応答の個人差要因を多面的に捉えることを目的とする。子どもが生後4ヶ月時に母親にインタビューを行い、「母親が抱くわが子のイメージ」および「特性としてのマインドマインディッドネス(MM)」を測定した。今後、子どもが生後6ヶ月時に母子相互作用の観察を実施し、そこでの調律的応答の生起頻度と「子どもイメージ」およびMMとの関連性を検討する予定である。本稿では、これまでに得られた第1時点でのインタビューデータについて予備的な分析を行い、その結果を報告する。

**【キー・ワード】 調律的応答, 共感, 情動的知性, アタッチメント**

### Abstract

Recently, some researchers have been focusing on “mothers' attuned responses” as a factor that promotes the development of children's emotional intelligence, including aspects such as empathy. This study aims to investigate factors that determine the frequency of mothers' attuned responses. As candidate factors, mothers' “mental representations of the child” and “mind-mindedness (MM)” were assessed through interviews with mothers when their infants were 4 months old. This article reports results of preliminary analyses of these interviews. Mothers' attuned responses will be observed when they are 6 months old.

**【Key words】 attuned response, empathy, emotional intelligence, attachment**

### 問題と目的

これまでアタッチメント研究の領域では、主たる養育者である母親の内的作業モデルが乳児とのやりとりの質に影響し、乳児はその相互作用の経験を積み重ねる中で、様々な感情面、認知面の発達を果たすとされてきた(e.g. van IJzendoorn, 1995; Knight, 2010)。そのメカニズムを支えるものとして

注目されてきたのは母親の感性(sensitivity)であり、母親が乳児の情動的シグナルに適切に応ずることができるかどうかには焦点が当てられた。この感性の本来の定義(Ainsworth, 1969)では、その一つの側面として母親の共感的態度が考慮されている。しかしこれまでの研究で実際に着目されてきたのは、母親が乳児の内的状態に共感的に応ずることそれ自体ではなく、母親が乳児のネガティブな情動状態をいかにスムーズになだめることができるかという調整(regulation)の側面であった(e.g. Sroufe, 1996)。

この風潮に対し、Fonagy et al. (2002)による一連の理論的考察は、母親が乳児に共感的に関わってやる「調律(attunement: Gallese et al., 2007)」の側面こそが、子どものその後の情動的知性の発達に不可欠であることを示唆する。調律とは、母親が乳児のネガティブな内的状態に巻き込まれ過ぎずに共感し、その情動についてのフィードバックをしてやることをさす。蒲谷(2012)はこれまで実証的知見が希薄であった調律の概念に着目し、実際の母子相互作用の中で母親がどのように調律的応答を行うのかを検証した。その結果、母親は泣きやむずかりといった乳児のネガティブ情動表出に対して「ポジティブ表情を伴った心境言及(例. 泣いている乳児に対して、笑顔を浮かべながら「悲しいね」と語りかける)」を行うこと、そしてその応答の生起頻度には母親間で明瞭な個人差があることが明らかとなった。

筆者は現在、乳幼児期におけるこういった調律的応答が、子どもの情動理解や共感性の発達にどのように影響するのかを縦断デザインを用いて検証中である。本研究ではその一環として、母親による調律的応答の生起頻度の個人差要因をより多面的に捉えることを目的とし、その主たる要因として、母親がわが子に対して抱くイメージ、および特性としてのマインドマインディッドネス(以下、MM)に着目した分析を行う。前者は、母親が妊娠期の時点から持つことが知られ、そのイメージの豊かさは母子相互作用の質に影響することが知られている(本島, 2007)。また後者は、母親が生まれて間もない乳児に対してやや過剰な心的帰属をすることであり、その特性的な帰属のしやすさ(MM)が、乳児との相互作用において心境言及を行う頻度と関連することが実証されている(篠原, 2006)。調律的応答はその性質上、これらの母親要因と密接な関連性を持つことが予想される。なお母親側の要因のみではなく、情動表出をする側の乳児の気質も調律的応答の生起頻度に影響を及ぼすと想定し、これを考慮した分析を行う。

## 方 法

### 1) 対象

生後 1 年未満の乳児とその母親 30~40 組(予定)。都内の複数の保育園に協力を依頼し、チラシを通じた募集を行った。調査参加者には事前に研究内容と方法について説明を行い、承諾を得た上で調査を実施した。

### 2) 研究デザイン

乳児が生後 4 ヶ月前後(第 1 時点)で「母親がわが子に対して抱くイメージ」、MM、そして乳児の気

質を測定し、生後6ヶ月前後(第2時点)で母子相互作用の観察を実施し、乳児の情動表出に対する母親の調律的応答の様相を捉える。そして第1時点における「わが子のイメージ」、MM、乳児気質の個人差が、第2時点における母親の調律的応答の生起頻度をいかに予測するかを検証する。

### 3) MMの測定

母親のMMを捉えるため、篠原(2006)に倣い、本研究の対象者ではない12名の乳児(女児7名、男児5名)とその母親の相互作用場面の映像データを素材として、5つのビデオクリップ(それぞれ約30秒間)を作成した。ビデオクリップのうち、2つは乳児の情動状態がニュートラル、1つは比較的ポジティブ、そして残りの2つは比較的ネガティブなもので構成されている。このビデオクリップを母親に呈示した上で、「映像中の赤ちゃんが、どんなことを感じたり、思ったり、考えたりしていると思うか」を問い、各母親が乳児に対してどれほど心的帰属をしやすいのかを測定する。

### 4) インタビュー

母親がわが子に対して抱くイメージを捉えるため、Zeanah et al. (1996)によるWorking Model of Child Interview(WMCI)を援用する。WMCIは、養育者が自身のおよび自身と子どもとの関係性について抱くイメージを捉えるために開発された半構造化インタビュー技法である。

### 5) 乳児の気質の測定

乳児の気質を捉えるため、佐藤(1988)による日本語版RITQを用いる。これは95項目、9因子から構成される質問紙であり、生後4~8ヶ月の乳児の行動特徴を捉えるものである。

### 6) 観察

おもちゃを交えた20分間の母子相互作用を観察する。母親とのやりとり中に乳児がポジティブからネガティブまで様々な情動を表出するように、相互作用の途中に準母子分離場面を設ける。

## 結果と考察

本稿では、現在までに得られた5名分の第1時点データについて報告する。

### 1) MM得点における個人差

篠原(2006)に倣い、5つのビデオクリップに対する母親の回答について乳児の内的状態に言及した回数をカウントし、MM得点とした。5人の母親の平均MM得点は10.0点であり、レンジは8~12であった。次に、言及された内的状態をその質的な側面から「感情状態(嬉しい、不安、など)」「欲求状態(~してほしい、~したい、など)」「思考・認知状態(何だろう、気になる、など)」の3種に分類し、カウントした。それぞれの平均生起数は、感情状態が2.4(レンジ0~4)、欲求状態が3.8(レンジ

1～7), 思考・認知状態が 3.8(レンジ 1～8)であった。

今回得られた平均 MM 得点は、各母親が一つのビデオクリップについて 2 回前後の内的状態言及を行ったことを示しており、各ビデオクリップがある程度心的帰属を行いやすいものであったことを示唆している。MM 得点においてはまだ大きな個人差は見られないが、その内容面については、特に欲求状態と思考・認知状態について生起数の大きなバラつきが見られた。これらの結果から、今回新たに作成されたビデオクリップでも、母親の MM について、特にその質的側面における個人差を測定することが可能であると考えられる。

## 2) 子どものイメージに関する語りの個人差

WMCI の質問項目のうち、子どもの性格について尋ねるもの(「お子さんはどのような性格であると感じられますか」など)、そして子どもと自身の関係性について尋ねるもの(「お母さまとお子さんとのご関係が、今どのようなものであるかお聞かせ下さい」など)への母親の回答に着目した。その結果、同一の質問内容であるにも関わらず、子どもの性格について比較的容易に具体的なイメージを述べる事ができる母親(例.「この子は新しい場所でも全く怖がらなくて、好奇心が旺盛で探検したがる。だからずり這いがはやくできるようになったのかも」)がいる一方で、イメージを言語化することに困難を感じる母親(例.「表現が難しい…この子はまだ喋らないし、よく分からない」)も見られた。今後、この質問項目に対する回答の量と質に着目することで、母親がわが子を「豊かな人格を持った他者」として捉えているかどうかを、ある程度吟味することが可能かもしれない。

## 現在の進捗状況

2012 年 12 月初旬の時点で 10 名前後の協力者を得ており、第 1 時点調査を取行中である。今後はより調査参加者を増やしつつ、第 2 時点の調査を随時実施してゆく。

## 引用文献

- Ainsworth, M.D. (1969) Maternal Sensitivity Scales From mimeograph. Johns Hopkins University, Baltimore. Revised 3/10/69
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. (2002) *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York, : Other Press LLC
- Gallese, V., Eagle, M.N., Migone, P. (2007) Intentional attunement: mirror neurons and the neural underpinnings of interpersonal relations *Journal of the American Psychoanalysis Association* 55 (1) 131-175
- 蒲谷慎介(2012) 母親による調律的応答の生起要因の検討: 母親の成人アタッチメントスタイルと乳児の気質の交互作用 日本心理学会第 76 回大会発表論文集
- Knight, R. (2010) Attachment Theory : In search of a relationship between attachment security

- and preschool children's level of empathy. *The Plymouth Student Scientist*, 4, (1), 240-258
- 本島優子(2007) 妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望  
*京都大学大学院教育学研究科紀要*, 53, 299-312
- 佐藤俊昭(1988) 子どもの気質の追跡研究：第 2 報・日本語版 ITQ-R とその使用経験. *東北大学  
教養部紀要(49)*, 196-175
- 篠原郁子(2006) 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発：母子相互作用との関  
連を含めて *心理学研究*, 77(3) 244-252
- Sroufe, L.A. (1996) *Emotional development : The organization of emotional life in the early  
years. Cambridge studies in social & emotional development.* New York, : Cambridge  
University Press.
- van IJzendoorn, M.H. (1995) Adult attachment representations, parental responsiveness, and  
infant attachment : A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment  
Interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387-403
- Zeanah, C.H., Benoit, D., Barton, M.L., & Hirshberg, L. (1996) Working Model of the Child  
Interview coding manual. Unpublished Manual

